

知ってますか
技術の

あれ
これ

11

工学の源流を探る(4)

ヘンリー・ダイアーと工部大学校



三浦 基弘

MIURA Motohiro

大東文化大学講師

本格的な技術教育施設 工部大学校

日本の工業教育の源流は明治期に求めることができよう。19世紀の中頃になると、ヨーロッパ各地で、エンジニアを組織的に育成するための工業教育制度ができた。それは、国際間の技術競争が激化し、万国博覧会の出品物などを通して、他国の技術水準が目に入るようになり、各国政府は工業教育の専門機関を設けることを余儀なくされたからである。

日本でも例外ではなく、維新後明治政府は、富国強兵と殖産興業の二大政策をとった。軍事技術は兵部省（のちの陸軍省・海軍省）が担当し、軍事以外の工業界の人材育成は工部省が力を注いだ。工部省の立案者は山尾庸三^{やま おようぞう}で、1871（明治4）年4月に小学校と大学校を設立し、大学校では「諸工学分科修業」と「諸工学技術ニ涉り活物実地ノ修業」を建学の精神とした。同年8月14日、工部省に工学寮を設けた。工学頭に山尾庸三が就任。教授陣はイギリスから雇い入れることにし、岩倉使節団の副使を兼ねた伊藤博文がマセソン商会のロンドン店長H.マセソン^{はやしただす}に人選を依頼した。伊藤は直ちに随行員林董（当時駐英公使）をマセソンに赴かせ、グラスゴー大学のW.J.M.ランキン教授の推薦でヘンリー・ダイアーを都検（principal）に選んだ。山尾は伊藤博文と「工部大学校建設の建議」を提出し、1877（明治10）年4月、工学寮を工部大学校（The Imperial college of Engineering 後の東京大学工学部）に改称し、開校した。しかし、山尾がこの学校の構想を示したとき、一部には、「日本にはまだ本

格的な工業がないのだから、そのための学校を設置することは、反対である」という意見があった。校長に大鳥圭介が就任。大鳥は、工学寮の生徒に「いくら西洋の工業を稽古しても吾生まれたる日本国の実情をよく知らないでは折角稽古して覚えた作業を実地に就て施すことが六ヶ^{むずか}しい、故に時々是我国のことも随分怠らず、勉励するようにしたいものだ」と訓示したという。しかし、実務的には招聘（お雇い）外国人であるヘンリー・ダイアーが大学校のカリキュラムを組むことになる。

ヘンリー・ダイアーの素顔

ダイアーは1848年、グラスゴーの郊外ボズウェルに生まれた。ここはかなり田舎であったようだ。ショッツ鉄工所があり、その付属学校としてウィルソン・スクールが設けられ、ダイアーはここで学んだ。校長のロバート・マグナムによると、「並々ならぬ忍耐と勤勉を示し、天賦の才能と結びつき、すべて一番であった」という。1863年、グラスゴーの克蘭ストンヒルにあるジェームス・エトキン社という鉄工所に勤務。昼はアレキサンダー・カーク技師の徒弟として働き、夜はアンダーソン・カレッジ（現ストラスクライド大学）で学んだ。カークはネイピア造船所で修業した新進気鋭の技師であった。ダイアーの徒弟奉公中、他の徒弟より勤勉と集中力で、急速な上達を示したという。徒弟期間（apprenticeship）が終わると1868年、ダイアーはカークの推薦でグラスゴー大学